



俳諧袖珍鈔
後編
二

^ 5
1128
9





倭語袖珍抄紀行部

古今會聚地輯

甲子紀行

數冊并

予里に於て其の紀行と包ひ三葉舟

下舟舟入とのひけんむう此人の

杖よりりて貞享甲子秋八月に

上の破産とまむる舟と舟のあり

ろさやけあり

舟よりりて其の紀行と包ひ三葉舟

杖よりりて貞享甲子秋八月に

上の破産とまむる舟と舟のあり

ろさやけあり

舟よりりて其の紀行と包ひ三葉舟

杖よりりて貞享甲子秋八月に

上の破産とまむる舟と舟のあり

ろさやけあり

舟よりりて其の紀行と包ひ三葉舟

杖よりりて貞享甲子秋八月に

上の破産とまむる舟と舟のあり

ろさやけあり



白きまのひてきつる浦あけけ
るよせつけけ

茶のまのや煤のつらさるるまふす
閑人の身命をよめて

若植て竹阿まかれば花の草
長月のけしめあつてあつて水半の

草をよのよおのれ果して流るる水
何のよむしよかそらしてけりかれば

髪を白く眉皺よりそ只命をよ
てこのまのひくまの故もあつて

見のち念をよけよおそ母の白髪
おろせよ浦あけけりよまの草

母を肩もやせりよとよそりよ
けり

ふよそりよ浦あけけりよまの草
大和ふよの御して若く那竹の

内よそりよあつて此のけりよまの
う浦あけけりよまの草

只よと休むあつて若くあつて
縁りよあつてあつてあつて

二上ふあ麻さふ請て屋上の松
をだんよあつてあつてあつて

あらん大さはよとたすよとよ
へげんかれ非情とよとよとよ

よひよれて芥斤の花とよあつて
よとよとよとよとよとよ

傳ねのあつてあつてあつてあつて
ひとりのあつてあつてあつてあつて

はらよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよ

のあつてあつてあつてあつてあつて
よとよとよとよとよとよとよとよ

けよとよとよとよとよとよとよとよ
のあつてあつてあつてあつてあつて

くつてあつてあつてあつてあつてあつて
んよとよとよとよとよとよとよとよ

よとよとよとよとよとよとよとよ
あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

名護屋に入るとこの日は船は
ねむくしはる舟あはれ
そは枕火もあつていそいで
かたはるはりませ

市人このまきんちのま
旅人どた

つとてはつらむらひのあはれ
海軍よりなつて

海軍のあつちのふふ
うふふとまかか

けり
けり

とつひくも山あふま
作舞うるもふ

ふふふとあつちの
ふふふとあつちの

二月もつと
水車や藤のつれづれ

末よりつて二井社風

山家とゆ

梅林

つとてはつらむらひのあはれ
梅の木の花もあつち

旅人西岸よりつて
ふふふとあつちの

大層なあつちの
ふふふとあつちの

かきさのあつちの
ふふふとあつちの

つとてはつらむらひのあはれ
つとてはつらむらひのあはれ

吟行

ふふふとあつちの
ふふふとあつちの

伊豆公暇ふふふの
ふふふとあつちの

ふふふとあつちの
ふふふとあつちの

と危張あすそ彼をあらふは
まけれ

わさとの一穂まきくさん子枕
け信家よまてら春覚寺の大願
あきとくむ月のけり免辻化
しあさうしよとこや夜の心地せ
らうとれ中つそこり女角さへ
りつりりり

勝杜ふ

白けしおめく襟れかき
二つし相敷さう行はりてとわ
平家あまらんしんふ
牡丹葉深くけりも地はなほ
甲斐の山守こまきりて
ゆく跡はまよふくさむ合うれ
卯月の末花よゆら松の芳気
そしれ行とれ
まなの中こまきみとあき

藤島紀行

浪の貝室吹テの浦の月見え
よ

ねのけや月々三三三
とさけんねまのむしもあ
き中しはび林かゆの山の月
見んと思ひまてあつ付人
ふさう浪家のよしとりて
いああの後さかしくせと
くあさ書の前て二名の袋
と於しあさけ出山のそ像を
厨子よあさたてくしろうせ
あし柱杖引あしとあし門の
舞もさうものわくあめちち
あまあてあぬとびとくい傍
まもあしは修しもゆしはあ
れりあさかきつりのあま
あまもあしあめく門より舟
このりり林とあまあま
舟とあうれらるものいあ

人しく起ぬぬ月の光雨のさび
あふれあふるききものむひよ
くらりていふよとの夜もあけ
たふしくと月見よきくさかひ
あふまらうわかたきくさき
かの何しれ女さう時をたきえ
ふ本をゆらうらうひもさあ
ふふよき高橋の人あふん

香

よりけはかきぬぬ月見
らけあふるききものむひよ
月や梅の白をたきあけく
さぬいふよとの夜もあけ
あふまらうわかたきくさき
月のひもさの折端のあふん

林あ

は松の空をえきかた林の林松を
ぬくもやよのあやの昔は家
孫おやかきと中りぬく昔の昔
田家

かりけはかきぬぬ月見
らけあふるききものむひよ
月や梅の白をたきあけく
さぬいふよとの夜もあけ
あふまらうわかたきくさき
月のひもさの折端のあふん

野

ゆひまや一花すは秋ころも
むの秋さよよひゆく時を
萩もや一歌いよき山の犬
樹さきまらう干之而た友すは松江
秋さこめくさくねはしれ
月かんとはひききのわと先

貞享丁卯仲秋末五日

かの三月の程を何つわうと一芥
 の力と入す我を捨ててあとも
 此帽をきくはけやれ物心
 け船りつとひておれおのをき
 といとふ心けしきいふき
 ちおれおれしきいふき
 たつさしきてゆくを視し
 物を捨ててゆくを視し
 人の心をきくはけやれ物心
 物めうくはけやれ物心
 そもくその日記とてその日記
 也長崎の舟の尾の文とてその
 情とてその日記とてその日記
 うとて其糟粕とてその日記
 とてその日記とてその日記
 等とてその日記とてその日記
 陰をうりておれしきいふき
 かに何れとてその日記とてその日記
 といとふ心けしきいふき
 也其書其書其書其書其書其書

いふことおれされともまき
 け風を心をけしきいふき
 しき悲し目とてその日記とてその日記
 本のたつとてその日記とてその日記
 本（たつとてその日記とてその日記）
 程破りておれしきいふき
 人の心をきくはけやれ物心
 人よして其書其書其書其書其書其書

海防の事

海防の事
 恐る針輪章公のけしきいふき
 といとふ心けしきいふき
 けしきいふき
 といとふ心けしきいふき
 けしきいふき

いふことおれされともまき
 け風を心をけしきいふき
 しき悲し目とてその日記とてその日記
 本のたつとてその日記とてその日記
 本（たつとてその日記とてその日記）
 程破りておれしきいふき
 人の心をきくはけやれ物心
 人よして其書其書其書其書其書其書

ゆ

をけれ二人移るたのりか
阿まつ徳子田の中よちうそゆり
て清より吹上る風のそよよそよ
あり

冬の日や上よわらかけやし
保美村より修良を逢へ二里より
もろくく二河本の地味きまそ
伊勢より海浦くそまゐれども
いらぬらぬまの茶葉集まらぬせ
の名取の中よまへひんまそ
け海所もも基石を拾ふそふら
こふろとまそや骨山とそ唐
やそふら南の海のもそ唐
のけいめしわらぬとそふら
唐のけいめしわらぬとそふら
いらぬらぬまの茶葉集まらぬせ
唐のけいめしわらぬとそふら

熱田の修良

唐直中鏡も清もまじ花

道左の人しくまへとくれまへく
休定すまほと

阿まんの命

あまつけとまんとまへと
まゆんまんとまへと

或人真り

まを掃る掃る掃る
ひりみ徳大植岐阜のすたりの清ひ
ありてあゆむら一折あそびくま
及ふゆを十口ゆり名護をまて
旧里まんとす

松竹まじりやはせの妹拂
まを掃る掃る掃る
の里よりまを掃る掃る
る屋と掃掃おろりてまを掃
る

からあふれ枝つき坂を登るが
と物うまの修りまを掃る掃る
二季の河入れ

くしつてすとてはつてしとがう
修し

かき長き此二月ゆりしめの茶
外植やちひよのひのほつて
やふひひはほつてそつてうま
ま心の茶の茶をそひく枝わと
師て昔神の茶まおひまんと
すつてかのいふ言つてそつて直
人の停あまそおむひ他は茶の
あつれとも見ぬつてそつてそつ
茶てそつてそつてそつてそつ
うう万菊花と名をそつてそつ
るつてそつてそつてそつてそつ
そつてそつてそつてそつてそつ
そつてそつてそつてそつてそつ
の肉を煮出す

乾坤無任同行二人

下つ時そそ松尺をうう松本堂
下つ時そそ松尺をうう松本堂
松の具お座ふかそつてそつてそつ
おつてそつてそつてそつてそつ

こと我のひとら金細やの物取手
紙兼亦管管自好を物と色こじ
ろよをわひこれいひつて勝つて
力あまそつての松さ本たひつて
ううそそそあつてそつてそつ
ううそつてのそつて

そつてそつて

是の松や龍人ゆり茶のそつ
足結そつて修もたつてそつて
葛塚山

修んてそつてそつてそつてそつ
三編のそつてそつてそつてそつ
そつてそつてそつてそつてそつ

龍門

龍門のそつてそつてそつてそつ
海のそつてそつてそつてそつ
西河

あつてそつてそつてそつてそつ
結於う海 布留の龍は布留の空

より二十五丁山のむくあり市川の
流津の玉袋田の川上よりあり
同く箕面勝尾寺へくまを
よけり

橋

さうらつたきこくや日こけり
りた花下きききひや何きき
庭を海くむりや政体く

昔昔水

ま面の木下は流ききききき
す神のむく二日ときききき
のたそくれのけききききき
の月の何ききききききき
よせきり袖よききききき
公の後よききききききき
よすききききききききき
おあききききききききき
もけききききききききき
のりききききききききき
しくけきききききききき

正なり

さる世

父母れあすうにありきききき
おあききききききききき

あきき

けききききききききききき

紀三母と

跪やあれあけりよひききき
のきききききききききき
すたききききききききき
ゆ原の果ききききききき
かんあきききききききき
さひゆ情の人の愛ききき
極ききききききききき
きあれい連中のきききき
寛ききききききききき
ゆききききききききき
まききききききききき
このきききききききき
のききききききききき

へんりあふてつれあひて町まきと
 抄りてに情をゆいむむりし
 つつと舟をゆりて人よあひていりち
 へんりあふてつれあひて町まきと
 かこくわうとあふれに情をゆいむむりし
 人もまじのそつまゝかこくわうと
 けしと舟のまじりてあひていりち
 ねと瓦石の中まきと情をゆいむむりし
 よこしとまきと情をゆいむむりし
 せ付人よもかこくわうとあひていりち
 又これ故のひもあふていりち

更云

ひもつれてしるよあひぬあふ
 へんりあふてつれあひて町まきと
 舟のまじりてあひていりち
 ねと瓦石の中まきと情をゆいむむりし
 よこしとまきと情をゆいむむりし
 せ付人よもかこくわうとあひていりち
 又これ故のひもあふていりち

の中は舟をゆりてつれあひて町まきと
 さをまきと情をゆいむむりし

この舟をゆりてつれあひて町まきと
 舟のまじりてあひていりち
 ねと瓦石の中まきと情をゆいむむりし
 よこしとまきと情をゆいむむりし
 せ付人よもかこくわうとあひていりち
 又これ故のひもあふていりち

舟のまじりてあひていりち
 ねと瓦石の中まきと情をゆいむむりし
 よこしとまきと情をゆいむむりし
 せ付人よもかこくわうとあひていりち
 又これ故のひもあふていりち

空の八高より稽す回行曾良ら
 曰は神の本の宗さくや神の神と
 中して南土二種と毎々宗より
 脱すあつてひのみあつてあつて出
 凡のふとせれあひつてあつて
 の八高より又りつてあつてあつて
 けつるもひ留ておつてあつて
 之魚と神と神記のひ白き
 他よりあつて

廿日光山の神龍は海にあり
 のまらふ中へ宗を佛と名づ
 と宗を直と宗とすつてあつて
 人つてあつてあつてあつてあつて
 枕もあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつて
 けつる東門のひ合はれあつてあつて
 人とあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつて
 只をあつてあつてあつてあつて
 固りあつてあつてあつてあつて

ちつあつてあつてあつてあつて
 あつて

舟月影を舟に宿おすは昔は
 舟は二意山とあつてあつてあつて
 手暮の討日先とあつてあつてあつて
 子孫東来とあつてあつてあつて
 今に舟光りて天よりあつてあつて
 息は八葉よりあつてあつてあつて
 栖あつてあつてあつてあつて
 てあつてあつてあつてあつて

何とあつてあつてあつてあつて
 思はふはあつてあつてあつてあつて
 利はあつてあつてあつてあつて
 曾良はあつてあつてあつてあつて
 意意の下宗とあつてあつてあつて
 舟水の舟とあつてあつてあつてあつて
 のあつてあつてあつてあつてあつて
 野松の神とあつてあつてあつてあつて
 松を利してあつてあつてあつてあつて
 区とあつてあつてあつてあつて

修養光のちとありてこまの
 れて行者をとおす
 友山と定法とをわきま
 弟をきき身ちのねくに伴ひ
 山居の松あり
 わたしとていふるに
 じやあもくやうふらう
 と松の葉して思ふと
 そやゆえふ甘味だん
 一杖とひけいん
 いふひひまふ人
 井さきこておわ
 山はくはけしき
 まし松放くらく
 お月の光と影さ
 知松を渡して山
 作らつこの屋を
 ぶらのおれつ石
 一柱ひひりり妙
 はまは海の名を

本家も能はば
 とたつたぬ一
 られより教
 るる毒草の中
 のたふまふの
 かさねりみず
 板のすん母の
 跡の世々の
 人をとやれと
 ひいとして
 よりつれ
 四一板板
 必得をより
 川の舞よか

つて勢とてかきりて丸くもこ
 たりし中にもは解の二園の二
 て俗語の人心をこむ秋風を耳
 につくし秋葉を供してまはせぬ
 枘がゆゑに秋の風の向物に
 羨の花の咲きひてさよもさあらん
 地をすまむ古く新をすまむ新世
 何とて丸くもかきりて満の年
 もとてめ置けりとも

つれづれとてかきりて丸くもこ
 たりし中にもは解の二園の二
 て俗語の人心をこむ秋風を耳
 につくし秋葉を供してまはせぬ
 枘がゆゑに秋の風の向物に
 羨の花の咲きひてさよもさあらん
 地をすまむ古く新をすまむ新世
 何とて丸くもかきりて満の年
 もとてめ置けりとも

懐明は物とひてんりしりし思ひ
 めらうさす

懐明のこゝろをわねくの田植
 春まきんかきりてかかれ八
 分とつてひて一巻とすぬい
 のかこゝろは太あゝ栗の本
 好して女をいひつれあり
 左山もかきりて言はあらん
 是れは

栗とてさきりて西の本とす
 才神出まらりありと行基
 藤の二巻杖も柱もい本
 用ひ身すまむや

妻の人のこゝろをわねくの
 冬も新くあそびてさ甲とす
 皮の扇をこまわれてあらん
 山は
 ありかつてかきりてあらん
 あれはつれづれの子とて
 とらえらうと人こゝろを
 つかれ

もまゝのまゝ人形はさきまひの
 とひらうととまゝのまゝのまゝ
 りたひのまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちりきれて馬塚の岩屋一見
 一掃南のまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃の石をさきて馬の甲ま
 ゆくまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 去り押して馬のまゝのまゝのまゝ
 さゝくまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 一掃南のまゝのまゝのまゝのまゝ
 して此石をさきて馬のまゝのまゝ
 こくひまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 下まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 とまゝのまゝ

おまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 月の掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 とまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 詠いたのまゝのまゝのまゝのまゝ
 あり飯塚の甲のまゝのまゝのまゝ
 ありのまゝのまゝのまゝのまゝ

君のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 大石のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 て掃をさきて馬のまゝのまゝのまゝ
 一家のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 の掃をさきて馬のまゝのまゝのまゝ
 なれまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 好慶海のまゝのまゝのまゝのまゝ
 け寺まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 行のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 て什物まゝ

君のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 五月のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 怪和のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 きり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ
 ちり掃のまゝのまゝのまゝのまゝ

ともあらずて多あつてて瑞の
 鹿角より破れ重の粒をわたり
 朽て既と散廢中流の最これ
 入ると西雨何くともみ
 荒とち後してゆるぎ志のく遊射
 子果の死念ともあかり
 しみくしの陣跡しや先者
 南都をさぐるのたたりて若
 の甲よりゆるみおぼゆるのふ
 とさそるるこのゆるみゆめあ
 算よからして物あつて人
 此後旅人すれあつてあられ
 ちよやめりてあつて
 算とて今大山のゆるりて日
 二層けし八射人のあつて
 今うとまると三日月あられ
 一の山の中をさるす
 世をみまのあつて
 何のゆるりてあつて
 と歸してさるるあつて

人の人たのまるとあつて
 さうやまると人ともあつて
 竟のあつてあつて
 杖とあつてあつて
 とう必危よのあつて
 かうあつてあつて
 ゆくあつてあつて
 とあつてあつて
 けりあつてあつて
 上はらあつてあつて
 又けりあつてあつて
 上つめあつてあつて
 ちうあつてあつて
 かうあつてあつて
 とあつてあつて
 物とあつてあつて
 尾尻あつてあつて
 尾尻あつてあつて
 志のあつてあつて

ふしそさすふ松の情も忘れ
はひはらめて長途の心もくらく
まもく好くゆ

啼く三狐をよにけし松すえ
さひやよかひ屋う下れひ土の春
眉掃と借うと紅粉の花
替換する人へ古代のすゝか
山歌娘よ三石さよと云ふ所へ
覺大休の子慕うと殊う情閑
の地あり一又す人よう人よけ
むらう懐て尾元居よりきて
うへうそる七面さよりくはすた
春千柿の物より桐より直して
上の春うのほら思ふよ装とさ
袷してふらう松栢さかり七石
衣して苔滑し岩上の院と鹿と
穿て物の方壁へ尺笥とあかり
岩とくくして伴圖と相く柱
京字実とくして心すくゆく
のくおわゆ

志のりや若くは入燈の夢

あかしの川をのんた大石田とて
よはわやちりこよふ絶世の情
とほほしてすれぬ花のむしと
あかしのきき角一帯の心とやと
けはらうとくくさうして秋さや
そよよあやまよとらよとてあや
すう人よあけまよとらよとてあ
秋一ぬはひひの風ゆるとあや
あやみ川にみちぬくもあてふ秋
とあよとすこころんやあやと
云わそろくき静おあつ松雲山
のふとあれてあふ海田のあよ
入れたるふあひあよのちよ舟と
下すこれと編つてあよとあこれ
あひいあやしし白糸の流あ
あまのひあしよあて仙人若岸
とあくま水とあきりて舟あ
あや

こゝれと集めんとや一と河

六月廿日おま山とて園をたきと
 とものをきくお南代書見は園
 梨と楊す南昔のお境と今と
 懐慈の懐とやういへりせり
 四日お坊におく徳能無の
 ともやををうわす南昔
 五日権祝と訪南山園南能徳有
 いつれの代お人ともをうい
 庭衣式と相お甲山の神社と坊
 せ書書名の字を甲山ともま
 一也相お甲山と中略して相意
 山ともやおおとくともまの
 毛羽と此山の貴と秋と
 お花と坊ともやん月山園
 を念として三山とす南昔武
 如東殿と属して天台止觀
 の月つらうと系お融圓の法
 此灯うけそひて徳能徳と
 らん徳能徳とそけり
 雲山と其地の徳能人貴ひ且

おる祭業とててめりて
 山と滑りて

八日月のちと本務志矢が
 引つた資利と改とつみ徳力
 とら母のいそひうれてお山
 と音の井と水とを踏ておと
 八甲と更下日月行道のお
 一入りと阿やとれ息徳と
 えて頂上と漂れは日及て月
 阿つら毎を徳源と徳と
 阿つら徳と徳りかて徳徳れ
 阿友よりと音のかとて徳
 徳小庭ともまは徳の徳徳
 水とえりひてそに徳徳
 て剣とてち徳り月山と徳と
 きりて母と徳とてか徳徳
 一剣と徳とてや千徳徳
 徳とてとてと徳徳の徳
 徳とてとてと徳徳の徳
 徳とてとてと徳徳の徳

去るしよと名や小松吹萩老
 此本は右田の神社に清寧堂と申
 鈴のきん河の垣を伴てし展を
 討義於よりたすのしをりせと也
 けしも平古のものし河は日鹿
 より吹入し中し菊かしくこの
 けりもの香をらりて先能取す
 紙形おくり更書討記の信書者
 義仲取抄とては社にこそあり
 といふし梅は京都へ後をいり
 ともしの河より流記は尺くあり
 ちきんやれかあつたれきりくは
 山中の怪鳥とゆくはとちく相う
 巖はうたあして何ゆひ左の山際
 二飲者平河り花山は宮と十三前
 の形れをさそひては大意大然
 れ信とあ道しあひて船音と名
 付のさうや那智谷組の二書を
 又ちち作しとさうまの石さあしくは
 古松極多し入てさるさきの小松

岩の上は造りては強弱の世地こ
 石山の石よりまろし秋の河
 怪鳥は信す丹次切さうし次とち
 山中や道八ひと取河のよあひ
 河とすしものハ久末く船とて
 いちこ小をさかれは文流世を好み
 信の真定をさまのむしとちり
 ありしは船轉しとつりあしと
 て河の舟く真流の門人と知て
 女とあつる切名のほは一村お河
 の料と流すととと文むし河
 といふは事ぬ

曾度ハ後と為て修治ふ長由
 とらおまはゆりやと河れは先き流し
 ゆきしてあふれ林とも萩の^長
 とと道よりひものちりひ流す
 もの^長ととと又信文のりつれく
 ちとち^長ととととととととと
 ちとち^長ととととととととと
 ちとち^長ととととととととと
 大智寺の縁か合名寺ととととと

帰る程加賀の地へ曾良も其の款
はよふとやうて

後曹林仰ききくやうく山
と結す一松の橋中甲一岡一草も
社為と申つた鹿寮上師の如きの
大なる懐懐赤うすひやに鐘板
のく食中入りしと改書思人と
心昇車よりて米トヨロとてその
信信とも我成とうえ階の中とて
ておひ事々お言座中け新
ちけい

座掃しておるやきまらる柳
えはぬぬさやして存難あしと虫
持の改書の候吉晴の入に草舟
は押さうしては越の松とてあぬ
秋もすうく病ははとてとて
月とてこれらほらりのね興行
は二そくそあ家通てりし一辨
と加つたものいせ用の指とま
うらや

九吾天祥寺の長老古く因られは
与ぬ又金蓮の七巻とてその極妙
はんさくはあすしとてい事あ
の御事とてさけあひつけしおき
あく舞あつた名ぬとてあつた
とこれとて

物さく扇引さくあつた
云十丁山よへて赤草寺とれすそ
え狩沙の序寺に邦機とてあつた
廻てかゝる山はよとてあつた
貴もなるともや福井に三里と
うりあれは文版とてあつた
なとてこれとてあつた
あつたとて古くはあつた
のさよとてあつた
ぬあつたとてあつた
けいてあつたとてあつた
人さつたとてあつた
そととてあつた
引かてあつたとてあつた

中より上志しめを僕ゆへに
舟よりのをて運付附のりて
足お候いりつらぬあまのふ家
くし徳くまは舞あつた後よ
茶と飲海とゆへめくたれ
のさひくさ感う場りり
よひしやゆてんらうて候
波のるあふひやうて候
そのあつはさる候てまよと
らせてちふ海を海通いひふ
中ん知むひてみあつて候
くたすけられ大垣のたふ
良も候あつらふり候て候
てと飛さそめりて候て候
川子前口は父さそあま
人ひ秋ひて舞のりもの
うもく直候ひ且つて候
うさも第に止らた月や
あれハ仔細に候て候
ふけりて

捨のふてあつて候て候

元禄廿一年四月奥羽の郡の
里正の家よりあつた主人の古
画をりて候て候を候て候
あまよふ候

東風羅神

禊子ゆへあまの候て候

西うら男

これ画候あつた候て候
こよ几をかまは候て候
月を加ふれ八月とあつた候
以て有とてあまの候て候
あり候て候て候て候
あまの候て候て候
候て候て候て候
これあまの候て候
に候の字一とあつた候て候

